

研修参加報告書

令和6年1月12日

会派名 江政クラブ
会派代表者 長尾 光春

(参加者：長尾光春、中野裕二)

研修参加の結果について、次のとおり報告します。

年月日	令和5年10月12日(木)～13日(金)
研修時間	10月12日 9:30～16:30 13日 9:30～11:50
研修場所	八戸市公会堂・公会堂文化ホール
研修内容	<p>第85回 全国都市問題会議 「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」</p> <p>講師：</p> <p>【基調講演】 東京藝術大学長、アーティスト 日比野 克彦氏</p> <p>【主報告】 青森県八戸市長 熊谷 雄一氏</p> <p>【一般報告】 文化事業ディレクター、演出家 吉川 由美氏 長野県東御市長 花岡 利夫氏 (株)鹿島アントラーズFC取締役副社長 鈴木 秀樹氏</p> <p>【パネルディスカッション】 (コーディネーター) 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 小林 真理氏</p> <p>(パネリスト) 合同会社 imajimu 代表取締役 今川 和佳子氏 柘植大学商学部 教授 松橋 崇史氏 静岡県沼津市長 頼重 秀一氏 京都府綾部市長 山崎 善也氏</p>

研修参加報告書

年月日	令和5年10月12日（木）～13日（金）
研修時間	10月12日 9:30～16:30 13日 9:30～11:50
研修場所	八戸市公会堂・公会堂文化ホール
研修内容	<p>第85回 全国都市問題会議 「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」</p> <p>講師：</p> <p>【基調講演】 東京藝術大学長、アーティスト 日比野 克彦氏</p> <p>【主報告】 青森県八戸市長 熊谷 雄一氏</p> <p>【一般報告】 文化事業ディレクター、演出家 吉川 由美氏 長野県東御市長 花岡 利夫氏 (株)鹿島アントラーズFC取締役副社長 鈴木 秀樹氏</p> <p>【パネルディスカッション】 (コーディネーター) 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 小林 真理氏</p> <p>(パネリスト) 合同会社 imajimu 代表取締役 今川 和佳子氏 柘植大学商学部 教授 松橋 崇史氏 静岡県沼津市長 頼重 秀一氏 京都府綾部市長 山崎 善也氏</p>
■目的	<p>全国都市問題会議では、自治体関係者と学者、研究者が一堂に会し、理論と実際の両面から、都市問題、地方自治について討議している。今回は、「文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展」をテーマにし、文化芸術・スポーツが持つ“都市の活力を生み出す力”とその力によってもたらされる“都市の魅力と発展につながる方策”について考察していく。</p>

■内容

1日目

(講義内容)

- ・【基調講演】 「アートの役割って何だろう？」
東京藝術大学長、アーティスト 日比野 克彦氏
- ・【主報告】 「八戸市の文化・スポーツによるまちづくり」
青森県八戸市長 熊谷 雄一氏
- ・【一般報告】 「まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる」
文化事業ディレクター、演出家 吉川 由美氏
「標高差 1,500m の地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」
長野県東御市長 花岡 利夫氏
「まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用」
(株)鹿島アントラーズ FC 取締役副社長
鈴木 秀樹氏

■日比野氏の基調講演では、アートとは美術、音楽、演劇などの形で表現されたものであり、これらのアートが人に及ぼす機能、可能性として、地域のコミュニティ活性化、社会課題解決につながることを改めて考え、岐阜県の長良川の冬の風物詩ともなっているアートイベント「こよみのよぶね」、全国 28 地域に広まった「明後日朝顔プロジェクト」、熊本市現代美術館「アトラボマーケット」など、様々な事例を示しながら、人と人、人とコミュニティ、そして地域と地域をつなぐ場面におけるアートの役割を深堀していきました。

この中では、アートの働きには3つの捉え方があることが紹介されました。

【アートの捉え方】

1. アートとは「生きる力である」
2. アートとは「多様性のある社会を築く基盤である」
3. アートとは「社会的な課題に対して持続的に取り組み続けていくには大切なものである」

■熊谷氏の主報告では、八戸市で定められている「はちのへ文化のまちづくりプラン～八戸市文化芸術推進基本計画～」や「八戸市スポーツ推進計画」において、多様で自主的な市民による文化活動を「多文化」と位置づけ、中心市街地活性化という地域課題に対し、文化・スポーツによるまちづくりとして意図的・段階的に行ってきた施設についての説明がありました。

文化によるまちづくりとして、八戸市のアーカイブ、ものづくりスタジオ、インキュベーション機能や子育て支援機能も有する「八戸ポータルミュージアム はっち」、各種イベントやコミュニティスペースとして機能する「八戸まちなか広場 マチニワ」、全国初の公設書店として注目されている「八戸ブックセンター」、美術館でありながら市民交流の場となる天井高 17 m のジャイアントルームと様々な機能に特化した個性的な個室群を擁する「八戸市美術館」など、魅力的な施設整備と丁寧な事業展開が確認できました。

スポーツによるまちづくりとして、防災拠点機能を併せ持つ屋内スケートリンク「八戸市長根屋内スケート場 Y S アリーナ八戸」、通常はアイスリンクでありながら、半日でバスケットボールコートに転換可能な「フラット八戸」などが整備されるとともに、スポーツのプロ化の波の中、プロサッカーチーム「ヴァンラーレ八戸 FC」、アイスホッケーチーム「東北フリーブレイズ」、バスケットボールBリーグ所属「青森ワッツ」、3人制バスケットボール3×3 EXE PREMIER 所属「八戸ダイム」のプロスポーツチームが市内に活動拠点をおき、活動できるような取組が行われていました。

これらの取組の目的は、1. 地域資源を活かす拠点とネットワークを作ること、2. 関心やテーマに基づくコミュニティと当事者を増やすこと、としており、地域づくりの当事者が増えることで、まちが豊かになることが年頭に置かれていることがわかりました。

■吉川氏の一般報告では、八戸市が中心街再生の起爆剤と位置付ける「八戸ポータルミュージアム はっち」の開館準備と開館後のアートプロジェクトに2010年から10年間携わり、「はっち」という箱モノを作るだけで終わらせず、当初の目的を達成するための取組、気づき等が報告されました。

「はっち」開館記念の「八戸レビュー」として88人の市民が88組の市民を取材して、それぞれのエピソードを執筆、そのエッセイをもとに写真家がポートレイトを撮影、「はっち」で展示するプロジェクトを展開し、最終的には400人以上の市民が参加したとの紹介がありました。

また、「デコトラヨイサー！」プロジェクトでは、映画「トラック野郎」シリーズのトラックが八戸近辺のトラックをモデルにしたものであることから、スパンコールなどをあしらったきらびやかなデコトラ風衣装をまとったダンサーが市場や横丁で踊るイベントを行い、その一環で、デコトラドライバーと衣装作りに参加した縫製好きの市民が語り合うトークイベントも開催されました。そこで、衣装作りに参加した女性から、デコトラドライバー達が八戸港から築地市場に「運んでくれなかったら、今の水産都市八戸はなかったのでは？」との発言があり、その場にいたすべての人が、普段接する機会のないデコトラドライバーがまちの発展を支えてきたことや、トラックドライバーのプライドに気づいたとのエピソードの紹介がありました。

地域の資源を大事に想いながら、新しい魅力を市民とともに創りあげる・創り出すことの取組として、「中心街をみんなの関心空間に」という言葉が印象的でした。

■花岡氏の一般報告では、長野県東御市で実施したオリンピック・パラリンピックを契機に整備した高地トレーニング施設整備の事例紹介がありました。

同市は市のほぼ中央を千曲川が東西に流れ、その右岸から浅間山系にかけては標高差が1,500mにもおよぶ南面傾斜の扇状地が広がり、左岸には標高600m~850mの2つの台地があり、変化に富んだ地勢が広がっており、平地が少ないことがまちの欠点として捉えられていたが、その欠点を認めた上で、転換思考をもって地域の資源（価値）につなげる取組を行った結果について、紹介がありました。

ここでは湯の丸高原の 1,750m という標高に専門家が着目し、施設のニーズについてアドバイスがあったとのこと。加えて「ケアポートみまき」を整備し、高地トレーニング施設で得られたエビデンスを地域住民の健康増進に還元する取組も行っていることが紹介されました。

また、自転車のヒルクライムやクロスウォークなどの高低差を楽しむイベントの活性化波及効果もあるとのこと。高低差が激しい地勢という弱みを、視点を変えて強みに変えたよい事例であることがわかりました。

■鈴木氏の一般報告では、同氏が代表取締役副社長を務めるプロサッカークラブ「鹿島アントラーズ」の存在を基軸にシティーセールスにつなげ、交流人口の増加、地域経済の発展を通じて地域を豊かにする可能性について報告されました。

国がスポーツ立国戦略で示す「する、見る、支える(育てる)」に加え、「稼ぐ」ができるのがプロスポーツであり、経済効果、人口動態、心象風景、QOL に大きな影響を与えることができること、またクラブが持つアセット(資産)を地域に還元し、持続可能な地域づくりに貢献するという役割を示されていました。

また、同スポーツクラブを中心に、社会課題であった高度な医療機関や教育機関の乏しさを解決すべく、カシマスタジアム横に「アントラーズスポーツクリニック」を設立し、チームドクター、理学療法士が連携し、整形外科医療やリハビリの高度なノウハウを地域に還元する体制を整えているとの事例が紹介されました。またホームタウン5市と教育委員会と協力し、地域の教育事業にも力をいれており、関連会社を通じた小中学校向けのプログラミング教室の開催を行っていることも紹介されました。

現在は市民の健康づくりへの還元としてフィットネス事業、児童・生徒への還元としてプログラミング教室、食育キャラバン、キャリアデザイン教室、教職員向け講話、スタジアムやクラブハウスを活用した学校外活動への協力など、幅広く取り組まれており、プロスポーツクラブを自治体として有効に使い切り、地域づくりにつなげていくことが重要であることがわかりました。

2日目

(講義内容)

- ・【パネルディスカッション】 一巡した文化芸術を活用したまちづくり
～自治体文化行政から魅力的なまちへ

(コーディネーター)

東京大学大学院人文社会系研究科

教授 小林 真理氏

(パネリスト)

合同会社 imajimu 代表取締役 今川 和佳子氏

柘植大学商学部 教授 松橋 崇史氏

静岡県沼津市長 頼重 秀一氏

京都府綾部市長 山崎 善也氏

■本パネルディスカッションでは、地元八戸市の文化を愛し、まちづくりアドバイザーとして奮闘されるお話、スポーツを通し、学生など若い世代の人材育成をされているお話、地域の資源を活かしたまちづくりのお話など様々、示唆に富んだお話を伺いました。

文化芸術・スポーツは、生きがいや潤いのある人生に繋がります。

「近き者悦ばば遠き者来る」

住民自身がそれぞれの地域に誇りを持たない限り、定住や交流の促進はおぼつかない。その土地を訪ねて来た人に対して自信を持って自分のまちの素晴らしさを語ることから地方創生は始まるとのお話に感銘を受けました。

■所感

今回の都市問題会議では、文化芸術・スポーツを通じたまちづくりについて、様々な視点から、「まちづくり・地域づくり」にどのようにつなげていくことができるか、という問題提起がされ、とても興味深い内容でした。

事例紹介の中で、それぞれの市町がもつ地理的問題点を逆に利用した取組を行うことや、プロスポーツクラブを自治体が最大限活用することで行えるまちづくり、アートや文化施設を活用したイベントを地域住民が自ら企画し、開催することによる参加型事業を取り入れることで、地域に暮らす人がその地域をさらに好きになり、それにより、さらに盛り上がることで、周辺市町の人々が興味を持ち、その地域に足を運ぶようになる取組がとても効果的であることもわかりました。

自分が暮らす市町には何もないと諦める前に、そこに暮らす人たちにまず、自分が暮らす市町の「いいところ」が何か、できるだけ多く取材し、まず、隠れた魅力の掘り起こしをし、噂話のように“こんなところがいい所”とアピールを始め、次にそのいい所をさらによくするイベントを始め、大きな声として周辺市町に発信し、交流人口を増やす取組は、どの市町で暮らしていてもすぐに始められることから、行政職員に積極的に働きかけていくことが重要であることがわかりました。